

<研究報告>

「死者と共に生きる」ということについて

Living with the Deceased

宮嶋 俊一（北海道大学）

Shunichi MIYAJIMA (Hokkaido University)

要旨

独居に至った原因として、配偶者との死別というケースが多い。人間にはいつか必ず死が訪れる以上、死別は多くの高齢者にとって不可避の別離であるとも言える。ただ、別れたとは言え、その存在をまったく消去できるかと言えば、なかなかそうはいかない。われわれの調査によれば、「毎朝、仏壇に手を合わせ、亡き人と対面する」、「亡き人の思い出の品と共に生きる」、「亡き人の思い出と共に生きている」といったケースが存在した。他方、「墓じまい」など、死者との関わりが閉ざされてしまうケースもあったが、その原因として、生者の共同体が十分に機能していないことが考えられる。残された者が、死者と共にいかに生きていくか、という問題は、残された者（独居高齢者）が、いかに死んでいくか、という問題と結びつく。そして現在の人間関係の喪失は、死者との関わりの喪失ももたらす。高齢者が自らの死後を考えることは、現在の人間関係のあり方を考えることでもあるが、生前から「死後の共同性」を模索する動きも生まれている。

Abstract

Living alone inevitably entails many cases where bereavement might occur. Death certainly comes to all human beings, so it can be said that bereavement, as a matter of fact, is an unavoidable separation amongst many elderly people. However, despite we perish, we cannot erase completely the existence of the deceased person. According to our research, there were some cases which could be possible defined as “living with the deceased”. Actions such as “to get hands on the altar every morning and to face the deceased person”, as well as “to live with the belongings that remind us the dead” or “to live with the memories of that person”, might be a proper correlate that illustrates well such definition. On the other hand, there were some cases reported where relations with the dead were concluded as well, such as a “closed grave”. However, regarding to these ones, we estimate that there are some difficulties within the living community itself, which might be not functioning sufficiently. The question of how the person who remains alive coexists with the deceased is linked to the problem of how such persons (elderly living alone) die. The current loss of human relations also brings about a loss of involvement with the deceased. So thinking about the posthumous death of the elderly is equivalent to some extent to think about the present situation of human relations. Related to that we might find what is called the practice of “cooperativeness after death” during lifetime.

Keywords : 死者 (deceased) 高齢者 (elderly) 死別 (bereavement) 宗教 (religion)
共同体 (community)

(1) 問題意識

独居高齢者の調査を通じて、「死者と共に生きる」ことについて、あるいは「死者との共同体」について考えるようになった¹⁾。元々一人暮らしを続けていた、という方を除けば、独居に至った原因として、配偶者との離婚や死別というケースが多い。人間にはいつか必ず死が訪れ、そしてまた、配偶者と同時に死ぬことがまれである以上、死別は多くの高齢者にとって不可避の別離であるとも言える。ただ、「別れた」とは言え、その存在をまったく消去できるかと言え、なかなかそうはいかない。「未だ心の中に生きている」であったり、「思い出の品を見る度に、亡き人を思い出す」であったり、あるいは「毎朝、仏壇に手を合わせ、亡き人と対面する」であったりと、形はさまざまであれ、遺された者は、亡き人と共に生きている。少なくとも、これまではそのように考えられることが多かった。例えば、小谷みどりはそれを次のように説明している。

大切な人を亡くした場合には、悲しみや喪失感、孤独感など、さまざまな思いが湧き起こる。大切な人の死は、残された人にとって、その人を失ったという事実だけでなく、その人との双方向の関係もなくなったという二重の喪失を意味する。(改行) 亡くなった大切な人に対しては、「わたしを見守ってくれている」「わたしの心の中に生きている」といった感覚を持つ人は多いだろう。その意味では、大切な人が亡くなっても、関係性は失われまいといえるかもしれないが、相手が亡くなっている以上、双方向に結ばれた関係ではない。つまり、残された人は、死をきっかけに大切な人との関係性を再構築することはできても、今までの双方向の関係性は、大切な人の死と共に失われる。しかし仏壇や遺影に手をあわせたり、お水やご飯を供えたり、心の中で話しかけたりするのは、こちらが死者を思う気持ちであるし、死者が見守ってくれているという感覚もこちら側の一方的な願望にすぎないものの、死者とのつながりがなくなったわけではない²⁾。

ところが、宗教評論家の島田裕巳は、上述のような考えとは異なる意見を述べている。「死者とともに生きる必要は、もうない。(改行) 少し前まで、私たちは死者とともに生きていた。というのも、死者は私たちと同居していたからである。(改行) もちろん、今でも死者とともに生きている人たちはいる。けれども、しだいに多くの人たちは、死者と同居し、死者とともに生きることを望まなくなってきた」³⁾。島田はこれに続けて、現在の仏壇やお墓、葬式等の事情について論じていく。

ただ、小谷も現代における葬儀や墓地のあり方が変化していることを論じており、死者との関わりは変化しつつある(あるいは、死者との関わりに対する考え方が多様化しつつある)という認識は共有されている。では、今回のわれわれが行ってきた調査において、「死者と共に生きている」と言える場面があるとすれば、それはどのような場面なのか、またそこに課題があるとすればどのような課題であるのか、そうしたことについて、論じてみたい。

(2) 調査報告

「死者と共に生きる」形として、ありがちではあるが、毎朝、仏壇に向き合うというケースは少なくなかった。

(例1) Aさん (男性、73歳)

○A 起床が8時前後ですね。それで朝いろいろやって、今であればストーブに火をつけたりなんかして。仏様、神様に水をあげて、朝食だね。

先ほどの小谷や島田の著作によれば、近年、とりわけ都市部では仏壇を所有する家庭は減少しているということだが、今回の私たちの調査ではほとんどの家に仏壇が置かれていた。それは、札幌市内でも釧路市内でも変わらない。統計的に仏壇を所有する家庭が減少していることは確かであるにせよ、独居高齢者の仏壇所有率は相対的に高いのではないかという予想ができる。

次に、自宅内に、亡き配偶者の所有物がそのまま残されているケースを紹介しよう。

(例2) Bさん (男性、70歳)

○質問者 (男性) ちなみに今気が付いたんですけど、パソコンも2台あって、2台も使われているんですね。

○B これは、こっちが女房なので、こっちが私のなんですよ。だからこのまま置いてあるんですよ。

○質問者 (男性) 奥さんのものをそのまま残されて。

○B 女房の方が大きいでしょ？ わかるでしょ？ どちらが強いかな。

○質問者 (男性) やはりまだ気持ちの中で？

○B 僕はもう吹っ切れましたけどね。

○質問者 (男性) もう寂しいとか、思い出したり。でも思い出されることもたまに？

○B それは思い出すことは思い出すけどね。最初1年間は寂しかったけど、もう3年過ぎるとね。

○質問者 (男性) むしろ吹っ切れたというかな。

これなども、「死者と共に生きる」例であると言えるだろう。Bさんの家庭には仏壇が備えられていた。だが、それだけでなく、「部屋がそのまま」に残されているのである。この場合、死者の存在を内面的・精神的に感じるというだけでなく、物質を通じて物理的・外在的にも確認しようとしている（その死を受け入れることが十分にできていない）と言えるかもしれない。ただしそれは、死者の不在をあらためて意識させられるということでもあるだろう。

(例3) Cさん (女性、76歳)

(看取りの場面について話した後で)

○質問者 (女性) そっか。いい最期だったんですね。

○C そうなんですよ。それから3年になるんです。それから3年なっても、まだちょっと涙出てきて。

○質問者 (女性) それはそうだよ。だって、四十何年一緒にいたんでしょ。

○C そうですよ。苦勞ばかりかけられて、もう苦勞ばかりかけたねって一言言ってほしかったよ。

これは、死者の記憶と共に生きる例と言えるだろう。ここでの記憶とは決して「悪い思い出」ではない。「苦勞ばかりかけたと一言言って欲しかった」と言っても、それは恨みがましいものではなく、むしろ死者が生きていたときのことを思い出しての言葉であると考えられる。だが、次の例にあるように、死者との思い出は、いい思い出ばかりというわけではない。

(例4) Dさん(女性、73歳)

○質問者(女性) ご主人の介護は本当に大変でしたか。

○D もちろん大変ですよ、認知症ですから。最初のころは、本当に介護鬱になるぐらい大変でした。最初のうちは徘徊があるので。とにかく気が休まらない。……おかしいですよ、行動が。もう全然おかしいです。夜中に出て行こうとしたりとか、とにかくそのころは大変でした。でも、デイサービスに週2回から3回行って。それが何年ぐらい続いたのかしらね。4、5年です。

亡くなる直前に予約してた老健が、ベッドが空いたからどうぞって言われて、……もうそこに行って、体はすごい楽ですよ。本当に寝たきりだから、食事の世話から下の世話から全部だし、ほとんど自分で体動かさせませんでしたから、寝返りも打てませんでしたから。……それで、病院のほうに移動して、病院と併設になってるので、ちょうど病室に入って3日半で亡くなりました。

最後もみんな、孫たちは学校だったけど、息子夫婦と娘夫婦と私でさよならってしたんですけど病院で。だから、よかったかなって思いますよ、今は。……でも、何か、ちょっと偉そうに言うんだけど、何か今となったら財産だったかなって、それが。誰も経験してないことを私は経験できたから。大変だったけど、それはそれでよかったなって思うし、子どもたちもすごい協力してくれて、孫も協力してくれて。(お孫さんの話が出た後) とっても、今幸せです。

この例も、死者の記憶と共に生きている例と言えるが、ただ楽しい思い出と共に生きるということとは、少し異なっている。この例の場合、死者との記憶は決して楽しいものではない。むしろ、辛いことばかりが思い起こされる。だが、時を経たことによって、その辛い体験にも何らかの、よい意味があるのではないか、という気持ちになっている。つまり、死者との経験を再解釈することによって、「死者と共に生きる」ことが可能になっている例であると言えるだろう。

以上、今回の調査から「死者と共に生きる」例をいくつか挙げてみた。最後に、今回の調査を離れて、伝統社会における死者との関わりを示した例として、柳田国男の『遠野物語』を紹介しよう。ここでは、第九九話を引用する。

九九 土淵村の助役北川清という人の家は字火石ひいしにあり。代々の山臥やまぶしにて祖父は正福院といい、学者にて著作多く、村のために尽したる人なり。清の弟に福二という人は海岸の田の浜へむこ婿に行きたるが、先年の大海嘯おおつなみに遭いて妻と子とを失い、生き残りたる二人の子とともに元の屋敷の地に小屋を掛けて一年ばかりありき。夏の初めの月夜に便所に起き出でしが、遠く離れたるところにありて行く道も浪の打つ渚なみなり。霧の布なごさきたる夜なりしが、その霧の中より男女二人の者の近よるを見れば、女は正まさしく亡くなりしわが妻なり。思わずその跡をつけて、遥々はるばると船越村の方へ行く崎の洞ほころあるところまで追行き、名を呼びたるに、振り返りてにこと笑いたり。男はとみればこれも同じ里の者にて海嘯の難に死せし者なり。自分が婿に入りし以前に互いに深く心を通わせたりと聞きし男なり。今はこの人と夫婦になりてありというに、子供は可愛くはないのかといえ、女は少しく顔の色を変えて泣きたり。死したる人と物いうとは思われずして、悲しく情なくなりたれば足元を見てありし間に、男女は再び足早にそこを立ち退きて、小浦へ行く道の山陰を廻り見えずなりたり。追いかけて見たりしがふと死したる者なりしと心づき、夜明けまで道中みちなかに立ちて考え、朝になりて帰たり。その後久しく煩わずらいたりといえり⁴⁾。

大津波の一年後、明治30年(1897)の夏の夜、津波で亡くなったはずの自分の妻が、やはり津

波で亡くなったはずの「元彼」と、連れだって現れる。「今はこの人と夫婦になっている」と亡き妻は言う。それに対して、「子どもはかわいくないのか」と残された夫は言う。亡き妻は顔色を変えて泣くが、結局は好きになった男と去っていく。この話を分析した石井は、当時家を継ぐため、恋愛関係あった男女が引き離されて「婿を取る」こともあり、この話にはそうした歴史的背景が反映したのではないかと論じている⁵⁾。また、石井によれば、佐々木喜善の資料には妻の亡骸は見つからず、仮の葬式を行ったとあるので、男が出会った亡き妻が、死者の亡霊であるのか、それとも生き残った妻であったのか、この話だけからは判別が難しいということである。いずれにせよ、東日本大震災後の東北地方で多く聞かれるようになった、いわゆる幽霊譚は上述の柳田国男の物語を彷彿とさせる。現代の東北地方の人々の暮らしに対して、安易に「伝統的」というレッテルを貼ってしまうのは危険であろうが、このような死者との関わり方がリアリティを有しているということではできらるだろう。

(3) 若干の考察

以上、「死者と共に生きる」ことの実例をいくつか示してきた。だが、実は、死別を体験した後、別れた死者と（生前とは別の形で）いかに生きていくかという問題は、自分自身がいかに死んでいくか、という問題とも結びついてくる⁶⁾。自分自身の死の看取り体験は、自らの「看取られ」を考えていくときの重要な素材となる。そして、自分の「看取られ」の場面に「看取る者」としての自分はいない。そうなれば、誰かが自分の果たした役割を果たさねばならないが、独居高齢者の場合、そうした存在を見出すのは難しい。つまり、(1) 残された者が（死者と共に）いかに生きていくか、という問題は、(2) 残された者（独居高齢者）が、いかに死んでいくか、という問題と結びつくのであって、両者をつなげて考えていくことが必要であると思われるのである。

小谷は、次のように述べている。「死者は、いずれは忘れられていく存在なので、そもそも残された人のなかで記憶されなくてもよいと考える人もいるかもしれない。その場合は、残された人のなかで、『死者は浄土へ行った』『星になった』『草場のかげで見守っている』など、死後の魂の行き場が必要になる。死んだら誰からも記憶されず、生きた証もなく、無になるだけであつたら、生きていること自体がむなしくなったりはしないだろうか。宗教的な来世観を持たない人が増えてきた現代の日本では、死者は残された人の記憶のなかで生き続けるしかない。その感覚があるのであれば、お葬式やお墓の無形化は何の問題もない」⁷⁾。この引用箇所だけだと少しわかりにくいので、言葉を補っていくと、次のように考えることができる。すなわち、伝統的・宗教的死生観がまだ存在していた社会では、死者は記憶されなくてもよいと考えられていた。なぜなら、浄土であれ、星であれ、草場の陰であれ、死者は「どこかにいる」と考えられていたからである。だが、伝統的・宗教的死生観が喪失した現代において、死者はどこかある場所に存在しているとは考えられていない。かといって、死者の存在が完全に否定されているわけでもない。死者は、生者の中で記憶として生き続けると考えられている。そして、それは生者にも、生きる意味をもたらしている。こうした考え方が普及することによって、「墓はいらない」「葬式もいらない」という事態が生じているのではないかと、小谷は論じているのである。

だが、それに対して、都市社会においては、このような死者との関わりは難しい。それは、そもそもが、生者同士の関係が希薄化しているからでもある。それゆえに死者との関わりも希薄化していくが、それはそのための様々な儀礼などにも現れている。小谷は、先の引用にさらに続けて、次のように述べている。「しかし昨今の現象は、死者とのつながりがないからこそお葬式やお墓の無形化であつて、これは、社会における人と人とのつながりが希薄化していることのあらわれでもある。そう考えると、お葬式やお墓の無形化は、信頼しあい、おたがいさまの共助の意識を持てる

人間関係が築けない限り、ますます進んでいくだろう⁸⁾。つまり、「死者との共同体」は、「生者の共同体」が十全に機能することによって成立するものであって、生者の共同体が崩壊してしまえば、死者と生者の共同体も崩壊してしまうのである。

(例5) Eさん(女性、84歳)

○D うち、長男なんですよ。それでね、墓じまいをしなきゃいけない。お墓をここに置いておいても、娘が今東京で住んでいるものですから帰ってきませんし、……帰ってきませんしね、本当に私、ひとりなんですよ、今。

現在の人間関係が喪失したことにより、死者との関わりもまた失われてしまうということを、この女性の訴えは示している。他方、このような事態に対して、「死後の共同性」を模索する動きもあるという。1999年に設立された兵庫県高齢者生活協同組合では、「ひとりぼっちの高齢者をなくそう」「寝たきりにならない、しない」というテーマを掲げて、老いを地域や会員同士で支え合う仕組みを構築してきたが、2014年には共同墓を民間霊園の一角に購入、この共同墓に入りたいという会員が増えたことから、生協では「永久の会」を結成し、様々な取り組みを行っているという⁹⁾。高齢者の方々が自らの死後を考えることは、現在の人間関係のあり方を考えることでもあることを、この事例は示していると言えるだろう。

(本報告は、2018年1月27日(土)札幌医科大学基礎医学研究棟1階102会議室にて開催された、北海道生命倫理研究会 第11回セミナー(2017年度冬季)での報告に基づいているが、当日報告できなかった内容も補足している。また、本稿は平成29年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)【基盤研究C:16K04075】の助成によるものである。インタビューの記載に関しては、個人が特定できないよう、発言主旨が変わらない範囲で一部改変した。)

- 1) 調査に関しては、拙稿「北海道における独居高齢者調査の現状と課題」『北海道生命倫理研究』Vol. 5, 2017年, 40-43頁, および船木祝/宮嶋俊一/山本武志/道信良子/栗屋剛「独居高齢者とともに生きる私たちの社会」『地域ケアリング2017年8月号』, Vol.19 (No.9), 2017年, 52-53頁を参照のこと。
- 2) 小谷みどり『〈ひとり死〉時代のお葬式とお墓』岩波新書, 2017年, 188-189頁。なお、死者とのコミュニケーションという問題については、拙稿「知識人と一般人の死後生観をつなぐ」東洋英和女学院大学死生学研究所編『死生学年報2018』リトン(近刊)を参照のこと。
- 3) 島田裕巳『0葬-あっさり死ぬ』集英社, 2014年, 2-3頁。
- 4) 柳田国男『柳田国男全集4』筑摩書房, 1989年, 57-58頁。
- 5) 石井正己『柳田国男 遠野物語』NHK出版, 2014年, 79-80頁。
- 6) 小谷前掲書を参照のこと。
- 7) 小谷前掲書, 205頁。
- 8) 小谷前掲書, 206頁。
- 9) 小谷前掲書, 178-179頁。なお、兵庫県高齢者生活協同組合に関する情報は、<http://kourei-h.org/index.html> (2018年3月5日最終アクセス)を参照のこと。